

18世紀のアンドレイ・タタリノフ  
露和語彙集の研究  
(第1部)

Исследование русско-японского лексикона  
Андрея Татаринова XVIII века  
(Часть первая)

北村 一 親

過去がなくは、現在もありません。

—— オリガ・ペトロワ\*

0. はじめに

アンドレイ・タタリノフ Андрей Татаринов —— 異国情緒を伴った遠い昔の記憶を呼び起こさせるかのようなこの名前は、異郷の地で父の祖国をうたかたの想いとして慕う漂流民の遺子として生まれた哀しさと共に、先人の余沢を忘れかけた後世の我々に語りかける貴重な北辺の言葉の響きに満ち溢れている。当時、南部藩領であった下北の佐井から江戸に向けて出帆した船が暴風によって北千島に漂着しなければ、歴史に名前すら留めなかった北槎の人々の雄叫びにも似た言語遺産に耳を傾けたい。

この研究は先行研究を再検討しながらアンドレイ・タタリノフによって編纂された露和語彙集の総合的な分析を目指すものであり、導論的概説にあたる本論考はタタリノフと同時代である18世紀の日本漂流民に基づく伝存する対訳語彙資料の簡単な通史を日露間の言語的交流史と併せて概観し、さらにアンドレイ・タタリノフの露和語彙集の再確認及び同語彙集に関する先行研究の批判的検討を進めながら、将来、公にする予定である総合的研究の基礎とするものである。なお、タタリノフと同時代の18世紀日本漂流民の言語資料とは、正確を期すならば、大阪を出帆した後、カムチャツカ南部に漂着し、1702年(元禄15年)ピョートル大帝に謁見してロシア語を学んで日本語を教えるように命じられた商人、デンベイ(伝兵衛?)に始まり、1793年(寛政5年)に仙台石巻を出帆した後、漂流した若宮丸の乗組員のうち津太夫、左平、儀兵衛、太郎の4名を送還する途上の船中で彼らから日本語を学び、日本語の入門書と露和辞典を書いたニコライ・レザノフ Николай Резанов までの資料を指す。タタリノフの露和語彙集

\*) エ・ライフマン[E.Рейхман]「日本を愛する人 —— 日本研究家オリガ・ペトロワ女史のこと」『今日のソ連邦』1962年19号(1962)、13頁。

の他には、特に語彙的史料価値の高いゴンザによる露和辞典とレザノフの露和語彙集が比較研究の中心となる。言うなれば、日本漂流民の言語資料としての18世紀「寿路和里」に関する体系的考察を企図するものである。

また、日本の方言学あるいは国語学にとってロシアという国への憧憬は、エデンの園において最も賢い生物である蛇からの誘惑にも似ている<sup>1)</sup>。この憧憬を蹉跎に変えないためにも本稿では将来における日本語とロシア語の両面からの詳細な検討への準備として、記述に際し伝統的な文献学的姿勢を前面に打ち出してタタリノフによる露和語彙集の分析を試みると同時に、ロシアの東洋学者オリガ・ペトロウナ・ペトロワ Ольга Петровна Петрова や日本の言語学者として稀有の存在であった村山七郎<sup>2)</sup>等の研究者にも光をあてることにより筆者が主張する「人—文献—データ」という言語学・文献学の基本的態度を表明したい。文献学における基本概念に関しては、古典的名著であるアウグスト・ベック等の方法論を参照して頂きたいが<sup>3)</sup>、現在の狭量かつ邪曲な言語研究を嘗ての黄金時代の状況に回復させるために膨大な資料からの徹底的な博引旁証を行いつつも、得られた言語資料に自ずから語らせることを旨とした。

文献研究の中で動もすれば見落としがちになるのは Realien あるいは Realkunde への視点であろう。ロシアへの漂流民研究の基本文献の一つである木崎良平『漂流民とロシア』において、木崎は漂流民に対する考察を二つの「方向」、即ち異常な体験に考察の中心を置く方向と海難事故そのものに考察の中心を置く方向に大別し、前者は歴史学的ではあっても個々の漂流事件の細部に捉われて、その物語性に重きを置きすぎるため全体的・総合的に捉えられず、後者は関心が漂流そのものに向いているため漂流民の歴史的意義を見出すことは関心外になりがちであるとして、「本書[木崎、前掲書]は、江戸時代におけるロシアへの漂流・抑留民を全体的に考察することを第一の目標とし、その全体像を捉えた上で、日露関係の発展・展開の中で彼らがいかなる役割を演じたかという視点から、その歴史的意義を明らかにすることを試みた<sup>4)</sup>と抱負を示しているにもかかわらず漂流の実態に関する記述は極端に少ない。本稿では当時の船は如何なる特徴があったのか、当時の船舶交通は如何様であったのか、何故、難破して漂流

- 1) ある古書肆から購入した本 (Giulio Bertoni, *Programma di filologia romanza come scienza idealistica*, Ginevra: Olschki, 1923) に挿し挟まっていた名刺 (ビジネス・カードではなくコーリング・カード) の「広島高等師範学校教授 東條 操」という印面の傍らに日本において最高の言語学者の一人である故 I. H. 教授の筆跡で「パリワ[ママ]ーナフ, 言語學概論 貸出し」[縦書き。傍線は故 I. H. 教授]とあるのを見つけた時に、別のある話を思い出した。それは、月刊『言語』7巻2号 (1978), 89頁上段所載の、これまた日本において最高の言語学者として I. H. 教授と並び称される故服部四郎教授の懐旧談である。服部教授談に出てくる「或る人」とこの名刺の持ち主とは当然、別人であろうが、日本の方言学や国語学、あるいは言語学におけるロシア人による言語研究への関心の高さを物語っているように思えてならない。(これは偏に孤高の東洋語学者イェウゲニ・ドミトリエウィチ・ポリワノフによるところが大きいのであるが。) なお、前述の購入本が故 I. H. 教授の手沢本であると判定するに至った詳しい経緯は割愛するが、その京都の古書肆から送られてきた古書目録を一瞥し、この大学者が歩んだ言語学の道程を各々の書目から読み取った次第である。
- 2) 村山七郎はドイツにてファスマー Max Vasmer に学んだ一代の碩学である。『日本語の起源』(弘文堂, 昭和48[1973]) という共著もある故大林太良先生から村山大人について色々なお話を伺いましたが (1992年7月)、紙幅の都合により割愛せざるを得ない。それは大林先生が学問史上、後世に残すべき逸話、特に学界から不当な学問的位置づけをされた研究者の悲話 (例えば小林高四郎のような) を纏めなければならないと予めから話しておられたことにも一脈相通じるものがあるように思われた。
- 3) August Böckh, *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, (hrsg. von Ernst Bratuscheck), Leipzig: Teubner, zweite Aufl., 1886.
- 4) 木崎良平『漂流民とロシア—北の黒船に揺れた幕末日本—』中央公論社, 1991, pp. i-ii.

したのかという疑問点にも些か目を配り、更には日露両国における外交的施策等々の細かな問題点をも理解した上で漂流民及びその所産である漂流民による言語資料の分析を目指した。これこそ正に総合的な文献学的研究であると筆者は自負している<sup>5)</sup>。

なお、本稿を執筆する契機を与えて頂いた上に貴重な資料や助言を賜った岩手大学教育学部の大野真男先生、及び同様に資料を使用させて頂いた同じく教育学部の菊地悟先生、人文社会科学部の笹尾道子先生、そして筆者のロシア語に関する質問に誠実に答えて下さったオリガ・オレゴウナ・ロゴワさんにこの場を借りて心からのお礼を申し上げたい。

## 1. 言語的日露通交簡史

日本とロシアにおいて互いに相手の言語を学び取る機会はある時は偶発的に到来し、またある時は野心的な行動の所産であった。日露間の言語的通交の歴史はオホツク海という海上の境界線ではあるが、領域を接する二つの国の間の極めて現実的な交渉の歴史でもあった。

ここではアンドレイ・タタリノフの露和語彙集を分析するに当たり、18世紀におけるロシアへの流槎の記録と、ロシア及び日本に伝存するこの時代のロシア語・日本語対訳語彙資料の簡単な通史を概観したい。

### 1.1. ロシアへの漂流民

18世紀において言語資料を記録に留めたロシアへの漂流民<sup>6)</sup>について時代順に略述するが、それに先んじて「漂流」自体に関しても簡単に触れておきたい。なお、言語資料に関する論及は次節以降で述べることにする。

17世紀後期までの廻船の航海は直線的に目的地を目指す「沖乗り」ではなく、陸岸沿いに遠回りをする「地乗り」であり、また帆走技術も水準が低く天候が悪化すれば最寄の港へ待避していたため海難としては座礁や沈没が多くて漂流は少なかった。しかしその後、皮肉にも中途半端な航海技術の発達や船舶の大型化などにより次第に漂流の発生が増加していった<sup>7)</sup>。漂流の原因として南波松太郎は次のようにまとめている——1. 根本的原因 (i) 渡海航法を知らないこと, (ii) 渡海船として必要な航海計器類を具備していないこと, (iii) 和磁石の方位目盛が粗いこと; 2. 間接原因 (i) 船体に水密甲板がないこと, (ii) 乾舷が小さいこと, (iii)

5) この意味において総合的な研究として鹿児島に拠点を置く「ゴンザファンクラブ」の研究成果をまとめた田頭壽雄『漂流民・ゴンザ』鹿児島：春苑堂出版、平成10 [1998] を筆者は挙げておく。これには大学関係者も参加しているものの、編著者自身は大学人ではない。しかし筆者が今回、本稿を執筆するに際し利用した数多くの研究に比して、2～3の着実な研究を除き、枠組みとしては最も総合的な著作であった。研究機関としての大学の真価が問われて然るべきである。

6) 本稿の取り扱う範囲を些か過ぎるが、生田美智子「漂流民と身体——日露文化交流のチャンネル——」、『大阪外国語大学論集』22号(2000)、178頁によると1702年のピョートル大帝のデンベイ謁見から1854年の日露和親条約締結まで13件の漂流民が記録されているという。同じく木崎良平による旨を明記した田頭壽雄『漂流民・ゴンザ』(前掲)、54-56頁も1695年のデンベイから1850年の紀伊天寿丸まで13件を挙げている。

7) 石井謙治『和船』I, 法政大学出版局, 1995, 343-346頁。

檣[帆柱]が一本であること、(iv) 舵が大きく船体に固着されていないこと、(v) 荷物を高く積み上げること; 3. 直接原因 (i) 檣を切り倒すこと、(ii) 舵の破損のこと、(iii) [遺体を載せて]伝馬[船]を流すこと<sup>8)</sup>。更に弁財船の船体構造を考えれば、本来は経済効率の上がるはずの構造がひとたび時化に遭うと漂流の原因となることが理解できる。即ち弁財船の船体は航(かわら)という厚い船底材を基本材とし、これに棚板を組み合わせ、更に船梁を入れて横の強度を持たせるが洋式船舶とは異なり肋骨を入れない簡単な構造であり、船首は太い水押(みよし)で尖っており、船尾は幅広の戸立造りになっていて、その後ろに外艫がある。外艫は船尾の流れを整え、速力の向上と舵効きをよくするが激しい波浪に対しては強度不足で、舵の破損と共にしばしば漂流の原因となるのである。暴風の中で逆艫をしても流される場合は最後の手段として檣を切り倒すが、結果としてこれも漂流の原因となるのである<sup>9)</sup>。

積荷や乗組員に対する法令違反の有無を検証するため江戸幕府や各藩では海難調査を厳重に行ったが、海難防止を目的とした造船技術及び航海技術の向上は省みられなかった。川合彦充の言葉を借りれば、「要するに、幕府や藩の海事法令には、幕府や藩の物資を確実に輸送することや、または有事の際に船や乗組員を徴発することや、あるいは税を取ることを目的としたものしか見あたらず、民間海運の保護・育成にあたろうという姿勢は見られない」のである<sup>10)</sup>。一旦、漂流すれば何箇月もの間、大海原を彷徨することになるが、漂流中、乗組員の肉体的ならびに精神的苦痛は想像を絶するものがある。

ロシアにおいて日本の漂流民に関する記述は当初から、即ち18世紀初めから存在するが、日本においては後に詳述する延享元年(1744年)の多賀丸遭難に関する記述が最初のものであり、それ以外の夫々の漂流民に関しては凡そ150年から200年経た明治17年(1884年)7月印行の外務省記録局纂修『外交志稿』を以って本邦初出とする<sup>11)</sup>。

ロシアに渡った漂流民<sup>12)</sup>で記録された最初の事例は、1695年(元禄8年)(推定)に江戸に向けて大阪を出帆し南カムチャツカに1696年(推定)に漂着したデンベイ Дэнбэй(伝兵衛?)である。デンベイはロシア人として初めてカムチャツカを発見したウラヂミル・アトラソフに見出され、2年間共に暮した後にモスクワに到着した。アトラソフは1700年6月にヤクツクで、1701年2月にモスクワのシベリア庁で報告(供述)<sup>13)</sup>を行い、またデンベイも1702年1月にモス

8) 南波松太郎「千石船の航海」、須藤利一他『船』法政大学出版局、1968、222-224頁。

9) 石井謙治『和船』I(前掲)、351-354頁。

10) 川合彦充「漂流」、須藤利一他『船』法政大学出版局、1968、239-276頁。

11) 外務省『外交志稿』國文社、明治17(1884)。

12) 以下を参照：Файнберг Э. Я. Русско-японские отношения в 1697 — 1875 гг. М., 1960; 及びその邦訳である E. ファインベルク(小川政邦訳)『ロシアと日本 — その交流の歴史 —』新時代社、1973; M. Dostojewsky, Rußlands Vordringen zum Stillen Ozean und seine erste Berührung mit Japan, *Japanisch-deutsche Zeitschrift*, Neue Folge, 2. Jahrgang (1930), S. 75-86, 104-116, 125-138; 村山七郎『漂流民の言語』吉川弘文館、昭和40[1965]; ウラジーミル・ミハイロヴィッチ・アルパートフ(下瀬川慧子・山下万里子・堤 正典訳)『ロシア・ソビエトにおける日本語研究』東海大学出版会、1992; 木崎良平『漂流民とロシア — 北の黒船に揺れた幕末日本 —』(前掲); ウェ・バルトリド(外務省調査部第三課訳)『歐洲殊に露西亞における東洋研究史』外務省調査部、昭和12[1937]; 八杉貞利「十八世紀に於る露西亞の東洋語研究」、『東洋時報』124号(明治42[1909]), 45頁下段-49頁上段, 127号(同), 38頁上段-42頁下段; 堀竹雄「元祿享保年間に於ける日本人」、『史学雑誌』29編12号(大正7[1918]), 15-34頁; 龜田次郎「露國創刊日露辭典及其編纂者」、『國學院雜誌』29卷(大正12[1923]), 57-81頁。

クワのシベリア庁で漂流前後の経緯や日本の国情等を供述した。デンベイによる供述はロシアにおける日本人による最初の日本に関する情報であった<sup>14)</sup>。これらの供述のうち前二者は村山七郎『漂流民の言語』に抜粋がドイツ語訳からの重訳で、デンベイの供述は同書にオグロブリンのロシア語原典（1891年刊行）からの邦訳が紹介されている<sup>15)</sup>。デンベイは同じく1702年1月にモスクワの近郊でピョートル1世（大帝）に謁見した。会見後にピョートル1世はこの外国人を国費で養い、スラヴ正教の信仰の受入れを強制せず、彼がロシア語を習得して3～4人のロシア人の「若い衆」に日本語の読み書きを教え込ませた後で国に帰すことを約束するようにシベリア庁に勅令を発した。しかし、デンベイは1710年にガウリイルという洗礼名を受けている<sup>16)</sup>。

日本でデンベイが最初に紹介されたのは、前述のように明治17年（1884年）7月印行の外務省記録局纂修『外交志稿』においてである。

「紀元二千三百五十四年甲戌東山天皇元祿七年西曆一千六百九十四年大阪ノ船露西亞東部東察加ノ「オパラ」河口ニ漂着ス全船溺死僅ニ一人ヲ存ス露國官吏之ヲ莫斯果府ニ送致ス」<sup>17)</sup>

バルトリドはデンベイを「聡明で禮儀正しい若者」と評しているアトラソフの言葉を紹介している。<sup>17bis)</sup> ちなみに、堀竹雄「元祿享保年間に於ける日本人」（大正12年（1923年））の前半はデンベイに関する記述である<sup>18)</sup>。

次いで二人目の人物は1710年（宝永7年）、カムチャツカ南部カリギル湾（アワチン湾北方）に漂着したサニマ Санима（三右衛門?）である。ドストイェフスキーやペトロワはサニマがデンベイの死後、1734年まで日本語を教えていたとする一方で<sup>19)</sup>、アルパートフは「日本人サニマ（三右衛門）のモスクワ及びペテルブルグにおける滞在（ペテルブルグには1714年から、または1719年からとの説もある）が何らかの[日本語教育の]実質的な結果をもたらしたかは知られていない」と述べている<sup>20)</sup>。サニマの出身地が明確に書かれた記録は残っていないが、亀井高孝・村山七郎はサニマの挙げたツィナル（津軽）、ナンブ（南部）、シェナイ（仙台）、という東北地方の詳しい地名、更に津軽をツィナルと発音する傾向から「北奥人」すなわち北東北の出身、特に津軽藩または南部藩の出身を想定している<sup>21)</sup>。

13) 村山七郎は『漂流民の言語』において「アトラソフの「第1物語」、アトラソフの「第2物語」、デンベイの物語」というようにロシア語 *сказка*（現代語 *сказка*）を「物語」と訳しているが、これはやや誤解を招く表現なので「供述」あるいは「証言」とした方が良いであろう。フェインベルクの邦訳（小川政邦訳）では的確に「口述書」としている。

14) *Файнберг*, Указ. соч., с. 20–21.

15) 村山七郎『漂流民の言語』（前掲）、5-6、8-13頁。

16) *Файнберг*, Указ. соч., с. 21. なおピョートル1世の勅令（イワノフの論文（1853年刊）による）の邦訳が村山七郎『クリル諸島の文献学的研究』三一書房、1987、59-60頁にある。

17) 外務省『外交志稿』（前掲）、420頁（巻之十四）。

17bis) バルトリド『歐洲殊に露西亞における東洋研究史』（前掲）、389頁。

18) 堀竹雄「元祿享保年間に於ける日本人」（前掲）、16-29頁。

19) *Dostojevsky, a. a. O.*, S. 83; *Петрова О. П.* Японский язык в России в первой половине XVIII века, — «Народы Азии и Африки», 1965, № 1, с. 164.

20) アルパートフ『ロシア・ソビエトにおける日本語研究』（前掲）、6頁。

21) 亀井高孝・村山七郎「日本漂流民とクンストカメラ」、『日本歴史』210号（昭和40[1965]）、18-19頁、注13。

これも日本で最初に紹介されたのは、前述のように明治17年(1884年)7月印行の外務省記録局纂修『外交志稿』においてである。

「中御門天皇寶永七年西曆一千七百年我船一艘露西亞國東察加ノ海岸「カリジアン」灣ニ漂着ス土人ト争闘シ四名ヲ失フ露國官吏其餘六名ヲ彼得堡ニ送致ス」<sup>22)</sup>

但し、この記述は若干、通説で言われているものと異なりズギブネフ等が主張する説を踏襲したものである<sup>23)</sup>。

三番目は言語学的にも文化史的にもタタリノフと同程度に(あるいはそれ以上に)重要であり、それは1728年(享保13年)11月、大阪に向けて薩摩を出て、翌年6月カムチャッカ南部東海岸に漂着した日本船ファヤキマル Фаяикъмар あるいはワカシワマルに乗組んでいたソザ Соза(宗左あるいは宗蔵?)とゴンザ Гонза(権左あるいは権蔵?)の事蹟である<sup>24)</sup>。二人はペテルブルクに送られ、女帝アンナ・ヨアノウナに謁見し、女帝の勅令でキリスト教の信条を学ぶべく陸軍幼年学校の修道司祭に渡された。1734年10月に幼年学校内の「主の復活」教会で洗礼を受け、ソザはクジマ・シュリツ Кузьма Шульц、ゴンザはデミヤン・ポモルツェフ Демьян Поморцев と名づけられた。1735年、ゴンザはロシア語文法を学ぶためにアレクサンドル・ネフスキー神学校に引渡された。二人は勅令によって科学アカデミヤに送られた。1736年には日本人はロシア語を学ぶだけでなくロシア人子弟に日本語を教えよという勅令が出た。ソザが1736年9月に43歳で死ぬとゴンザは直ちにペテルブルクのアカデミヤ司書補アンドレイ・ボグダノフの指導のもとで彼としては大著である露和辞典を著した後、1739年12月に21歳で死去した。科学アカデミヤは二人がロシアに滞在したことを記念して肖像を画き、また蠟製の頭像を作り、帝室美術品陳列館(クンストカメラ)に収めた。今日でも人類学・民族学博物館に保存されている<sup>25)</sup>。

ゴンザは10歳前後で故国を離れたため仮名も漢字も知らなかったが、ソザが亡くなるまでの7年間、二人が一緒に暮らしたことはゴンザの日本語の語彙を豊かにさせたであろうし、ゴンザが「百」という漢字を知っていたのは、おそらくペテルブルクでソザに教えてもらったであろう<sup>26)</sup>。ペトロワがゴンザの音声転写に対して全く評価していないこと<sup>27)</sup>に対し、村山七郎は、「ペトロワさんのゴンザ評価には賛成しかねる。もしペトロワさんが方言学的見地からゴンザの資料を見たなら、いかに貴重なものがそのうちに潜んでいるかを見出すであろう」<sup>28)</sup>と反論し、さらに「ゴンザが19-20歳のときにこれだけ優れた辞典を書き上げたことは、18世紀前

22) 外務省『外交志稿』(前掲), 420頁(卷之十四)。

23) 木崎良平『漂流民とロシア』(前掲), 14頁。

24) ゴンザに関しては注12の文献の他に、村山七郎編(井桁貞義・興水則子協力)『ゴンザ 新ストラヴ・日本語辞典 日本版』ナウカ, 1985; 亀井高孝・村山七郎「日本漂流民とクンストカメラ」(前掲)を参照。

25) ソザとゴンザの蠟製の頭像に関する詳細は亀井高孝・村山七郎「日本漂流民とクンストカメラ」(前掲), 4-7頁を参照。

26) 「私[村山]はレニングラードでゴンザの書いたもの[漢字]を見た」(村山七郎編『ゴンザ 新ストラヴ・日本語辞典』(前掲), 8-9頁)。

27) «Лексикон» русско-японский Андрея Татаринова. Издание текста и предисловие О. П. Петровой. Изд-во Восточной Литературы, М., 1962, с. 7.

28) 村山七郎『漂流民の言語』(前掲), 224頁。

半の薩摩の高い文化の環境の中で少年時代を送ったからこそ可能だったであろう<sup>29)</sup> というようにゴンザの育った文化的背景をも考慮に入れて評価している。筆者としては村山の最初に引用した件に関しては全く同感であるし、現在では内外を問わず、ゴンザの露和辞典に対する評価は極めて高い<sup>30)</sup>。よく引かれるように嘗てバルトリドは総合的に概観しうる東洋学者の視点からゴンザを捉え、「この天才的な青年は、当時の人の批評によれば、上手にロシア語で自分の意見を述べ、美事に日本語を教へたといふことである」と記述している<sup>31)</sup>。但し村山の第二番目に引用した点に関しては些か留保したい。薩摩という土地が文化的にも政治経済の面でも成熟していたからこそ幕末期に西国の雄藩の筆頭として政治の舞台に踊り出たことは確かである。しかしゴンザの秀逸さは単にゴンザ本人の天性のものであると考えないと思わぬ過誤に陥ってしまう危険性を孕んでいる。ゴンザと同じく高い文化環境に育ったはずのソザが辞典類を編纂しなかったことを慮れば直ちに筆者の言わんとすることが理解できると思う。嘗て新村出は「伊勢漂民の事蹟」においてパラスの『欽定全世界言語比較辞典』を光太夫が日本語の部分で改訂する件で「奥州の卑語を訂正し得た丈でも、由緒ある伊勢人の語學上の功績は認められる<sup>32)</sup>」としたが、ここで言う「奥州の卑語」は光太夫の表現では「南部邊の言葉<sup>33)</sup>」に当たり、「由緒ある[伊勢人]」とは鈴屋の大人を指しているのであろうが、これらのような *сентиментализм* は悲劇の世紀の内に封印するのが宜しかろう。以って我が研究を遂行する上での戒めとしたい。

デンベイやサニマの場合と同じく日本で最初にソザとゴンザが紹介されたのは、明治17年(1884年)7月印行の外務省記録局纂修『外交志稿』においてである。

「享保十四年西曆一千七百二十九年七月薩摩若島丸一船風ニ逢フテ露國東察加ノ海岸ニ漂着シ土人ノ爲メニ害セラレ所左權左ノ二人僅ニ生命ヲ全フシ彼得堡ニ送ラル<sup>34)</sup>」

更にここでゴンザの辞典等の編纂や執筆の指導に当たったアンドレイ・イワノウィチ・ボグダノフ Андрей Иванович Богданов についても言及しておく必要がある。何故ならばボグダノフは漂流民であるデンベイ或はサニマの息子であるという言説が内外に広く行われてきたからである。かの『ブロックハウス・エフロン百科辞典』にも«Богдановъ (Андрей)»の項目で「1707年にシベリアで生粋の日本人から生まれた<sup>35)</sup>」とあり、日本でも八杉貞利や龜田次郎らはサニマがロシア人女性と結婚して設けた子供がアンドレイ・ボグダノフであると書いている。<sup>36)</sup> 木崎良平は、ペテルブルク主教管区の信徒名簿に日本人の子供で画家であった者とアカ

29) 村山七郎編『ゴンザ 新スラヴ・日本語辞典』(前掲), 3頁。

30) 「この辞典は18世紀の日本語を研究するために大きな意義を有する。この辞典はゴンザが用いた九州南部の薩摩(現在の鹿児島)の方言の珍重すべき資料から成っている。この辞典は他のより詳細な資料より100年以上も前に作られており、鹿児島方言に生じたいくつかの変化の過程の年代推定を可能にしている。」(アルバートフ『ロシア・ソビエトにおける日本語研究』(前掲), 7頁)。

31) バルトリド『歐洲殊に露西亞における東洋研究史』(前掲), 391頁。

32) 新村出「伊勢漂民の事蹟」, 『南蠻廣記』岩波, 大正14[1925], 254頁。

33) 龜井高孝(編)『北槎聞略』三秀舎, 昭和12[1937], 260頁。

34) 外務省『外交志稿』(前掲), 420頁(卷之十四)。

35) Энциклопедический словарь (Брокгауза и Ефрона), СПб., 1891, т. IV, с. 160 б.

36) 八杉貞利「十八世紀に於る露西亞の東洋語研究」(前掲), 124号, 47頁上段; 龜田次郎「露國創刊日露辭典及其編纂者」(前掲), 58頁。しかし、驚くことに八杉論文の続編127号, 40頁上段では「ゴムベイ」[ママ]の子にあたる「アンドレイ, ボグダノフ」となっている!

デミヤの司書であった者の二人のアンドレイ・ボグダノフが記載されているため取違えたものであり、司書のアンドレイ・ボグダノフはデンベイもサニマも日本に未だいた1693年頃にノウゴロドで生まれたのでこれらの子供であるというのは誤りであるとしている<sup>37)</sup>。ちなみに『ソヴィエト大百科事典』には「БОГДАНОВ Андрей Иванович (1692-11.9.1766)」となっていて出生地の記述はない<sup>38)</sup>。木崎の記述で興味深いのは「画家のボグダノフの方は、「信徒名簿」によれば、1706年か1707年に生れたと判断される。とすれば、この日本人の子ボグダノフは、三右衛門[サニマ]の子ではなく、伝兵衛[デンベイ]の子であったと思われる。当時、三右衛門は、まだカムチャツカにも漂着していない。もし、画家のボグダノフが伝兵衛の子であったとすれば、伝兵衛のロシア名は、従来、ガヴリエルとだけ知られていたが、その苗字はボグダノフといったことになる」ということである<sup>39)</sup>。

第四番目に記録された漂流民一行は1744年(延享元年)11月、江戸に向けて南部藩佐井港から出帆した竹内徳兵衛所有の多賀丸の日本人であり、その中の一人の息子が今回の論考の中心となるタタリノフである。そして彼が編纂したのが露和語彙集である。この件に関しては第2部で詳しく扱うことにする。

第五番目のロシアへの日本漂流民は1782年(天明2年)12月、江戸に向けて伊勢の白子港を出帆した大黒屋光太夫らであり、翌年アリューシャン列島のアムチツカ島に漂着した。これが新村出が言うところの「伊勢漂流民」であり、井上靖の小説(『おろしや国酔夢譚』)にも採り入れられた大黒屋光太夫一行である。村山七郎の『漂流民の言語』第VII章はこの光太夫の残した言語資料の分析に当てられている。言語資料自体に関しては次節にて言及するが、ここでは村山に従い、日付をそのまま入れて年譜を示す<sup>40)</sup>。

大黒屋光太夫(1751-1828)伊勢国白子の南若松で生まれ、商家に育って30歳ごろまで過ごし、百姓彦兵衛の所有船である神昌丸(1000石積)の船頭となる

1782年12月9日、船員16人と共に白子浦を出帆

1783年7月20日、アリューシャン列島のアムチツカ島に漂着

1787年7月18日、アムチツカ島発

1788年8月30日、オホツク着

1788年11月19日、ヤクツク着

1789年2月7日、イルクツク着。2年滞在。生存者は光太夫、小市、磯吉、新蔵、庄蔵。

1791年1月15日、光太夫はキリル・ラクスマン教授に同伴して、イルクツク発

1791年2月29日、ペテルブルクに到着(同年5月、新蔵も後から到着)

1791年6月29日、ツァルスコエ・セロ(現プシキン市)でエカテリナ2世に拝謁

ペテルブルク滞在中、『欽定全世界言語比較辞典』の改訂に参加

1791年11月26日、ペテルブルク発

1792年1月3日、イルクツク着

1792年5月20日、光太夫、小市、磯吉はキリル・ラクスマン教授、その子アダム・ラクスマンと共にイルクツク発

37) 木崎良平『漂流民とロシア』(前掲), 23-24頁。

38) Большая Советская Энциклопедия, М., 1970, т. III, с. 443 в.

39) 木崎良平『漂流民とロシア』(前掲), 24頁。

40) 村山七郎『漂流民の言語』(前掲), 239頁。

1792年8月3日，オホツク着

1792年9月13日，3名の日本人はロシアの最初の対日使節団（団長アダム・ラクスマン）をのせたエカテリナ号でオホツクを出発

1792年10月7日（陰暦9月3日），根室着

1793年4月2日，小市は根室で病死

1793年6月8日，使節団は函館着

1793年6月24日，光太夫，磯吉を日本側に引き渡した

光太夫に関して極く簡潔にかつ要領よく纏めた次の言葉は印象的である。

「光太夫はイルクーツクにあるロシア官憲の思はくに終始背いて遂に帰還の目的を達成した。従って彼は正則なロシア語教育は受けてゐない。しかし彼自身が持つ素質と十年間のロシアの生活により——アリュージャンやカムチャツカよりもイルクーツクならびに首都ペテルブルグにおける生活は短くても話言葉では大して不自由しなかつたと推測する。ペテルブルグ滞在は半年あまりにすぎなかつたにせよ，[中略]おのづから言葉遣ひも一往次第に洗練されたらう。」<sup>41)</sup>

光太夫は島を出て本土に移ってから半年後にニジネカムチャックでフランス人レセプスに会っている。その時のレセプスの光太夫に対する印象は「彼（光太夫）は自分の思っていることを他人にわからせるだけにロシア語を話す。けれども彼と会話するためにはその発音に慣れなければならない……」<sup>42)</sup> というものだった。

なおロシア科学アカデミヤ・アジア諸民族研究所サンクト・ペテルブルク支部に光太夫が所持していた蔵書が何点か所蔵されている<sup>43)</sup>。

外務省記録局纂修『外交志稿』には光太夫（ここでは幸太夫）等が1792年（寛政4年）に根室に帰還した時の件が載っている。

「紀元二千四百五十二年光格天皇寛政四年壬子西曆一千七百九十二年九月露西亞國ノ聘使伊勢ノ漂民幸太夫等ヲ蝦夷ノ根室[ルビ：子モロ]ニ護送ス幸太夫等十六人天明二年十二月駿河洋中ニ於テ逆風ニ逢ヒ漂蕩スルハ八月三年七月露國東部亞美勢斯克島ニ漂着シ淹留スルハ四年ニシテ東察加ニ至リ俄考斯克義耳國斯克[ルビ：オホツカイルコツカ]ヲ經テ寛政三年二月彼得堡ニ着シ女帝加太隣ニ謁シ今年九月露國ノ聘使ニ伴ハレ十月東蝦夷「ハラサン」ニ抵リ此ニ至テ根室ニ着ス」<sup>44)</sup>

今回，本論考で扱う最後の漂流民は1793年（寛政5年）11月，江戸に向けて仙台石巻を出帆して翌1794年（寛政6年）にアリュージャン列島のアンドレアノフ諸島に漂着した若宮丸の乗組員一行である。一行の内，津太夫，左平，儀兵衛，太十郎はロシアの第2回対日使節団長ニコライ・レザノフと共にクロンシュタットから南米を回り，カムチャツカに寄って1804年（文

41) 亀井高孝・村山七郎・中村喜和『魯西亜辨語』近藤出版社，昭和47[1972]，5頁。

42) 亀井高孝『大黒屋光太夫』吉川弘文館，昭和39[1964]，197頁。

43) 亀井高孝『光太夫の悲恋』吉川弘文館，昭和42[1967]，21-33頁。

44) 外務省『外交志稿』（前掲），421頁（巻之十四）。

化元年)に長崎に帰ったが、善六等はロシアに残った。(善六はロシア姓をキセリョフと言い、イルクツクの日本語学校で日本語を教えた。)

外務省記録局纂修『外交志稿』には次のように記述されている。(かなり詳しい内容を載せているが、ここでは冒頭のみを示す。)

「文化元年甲子九月露西亞國使列薩乃布〔ルビ：レサノツト〕我漂流民陸奥寒風澤濱ノ水主左平津大夫等四人ヲ長崎ニ護送ス〔略〕<sup>45)</sup>

以上、大阪を出帆した後、カムチャツカ南部に漂着し、1702年(元禄15年)ピョートル大帝に謁見してロシア語を学んで日本語を教えるように命じられた商人、デンベイに始まり、1793年(寛政5年)に仙台石巻を出帆した後、漂流した若宮丸の乗組員のうち津太夫、左平、儀兵衛、太一郎の4名を送還する途上の船中で彼らから日本語を学び、日本語の入門書と露和辞典を書いたニコライ・レザノフ Николай Резанов までの18世紀の言語資料に関わるロシアに漂着した日本漂流民を時代順に見てきた。次節ではそれらの漂流民が残した言語資料を見ていくことにする。

## 1.2. ロシアにおける日本語資料

「ロシアの日本語研究は、日本の漂流民を日本語教師として始まった<sup>46)</sup>」というように言語学的に日本漂流民の果たした役割は大きい。ロシアに残された18世紀の日本漂流民の日本語資料を前節の順に見て行くことにする<sup>47)</sup>。

デンベイは1702年モスクワのシベリア庁で日本の国情に関する報告(供述)を行ったが、その中に大阪方言の特徴を示すといわれる約40語が含まれている。これらの単語はロシア人によって記録されたものであり、当時のデンベイはロシア語をある程度理解していたが自分で書くことは出来なかったようである<sup>48)</sup>。資料は村山七郎『漂流民の言語』、「I. 伝兵衛に関するロシアの記録と17世紀末の大阪方言」に収録されている。続くサニマの言語資料は全く残されていないが、彼はペテルブルクではデンベイの助手であった。

ゴンザの残した言語資料は質量共に最高のものの一つである。アルパトフはロシアにおいて日本語学習の問題を最初に提起したのはピョートル1世であり、彼がデンベイにロシア語を覚えさせ、3~4人のロシア人の「若い衆」に日本語の読み書きを教えるように指示した時点を以ってロシアにおける日本語教育の始まりとすべきであると言いつつも日本語教育に関する最初の具体的な資料はソザとゴンザの二人がペテルブルクに到着したことによって現れるとして、「ロシアにおける日本に関する知識の発展に顕著な足跡を残している。その稀に見る大きな功績は、おそらくゴンザの疑いもない言語的才能によるものである」と書いている<sup>49)</sup>。

45) 同上書、422-423頁(巻之十四)。

46) 飛田良文「ロシア学資料」、『国語学研究事典』明治書院、昭和52[1977]、782頁中段。

47) 本節においては注12、注24の文献の他に、飛田良文「ロシア学資料」(前掲)を参照。またレザノフに関してはニコライ・レザノフ編著、日本版 田中継根編訳『日本語辞典・露日会話帳』仙台：東北大学東北アジア研究センター、2001も瞥見した。

48) 村山七郎『漂流民の言語』(前掲)、IV頁。

49) アルパトフ『ロシア・ソビエトにおける日本語研究』(前掲)、5-6頁。

ゴンザはボグダノフの指導の下に次の6点の辞書・文法書・会話書等を執筆・編纂している。

- 『[項目別露和] 単語集』(1736年)
- 『日本語会話入門』(1736年)
- 『新・スラヴ語・日本語辞典』(1736年～1738年)
- 『簡略[日本語] 文法』(1738年)
- 『友好会話見本』(1739年)
- 『図解感覚世界』(1739年)

最も重要なのは『新・スラヴ語・日本語辞典』Новый лексиконъ славено японскійで、ロシア文字で書かれた日本語名は Ника лексикончъ славено ѿфонно-котобантъ (ニカ レクシコンチ スラヴェノ ニフォンノコトバント) である。内容は左欄に「スラヴ語」(=ロシア語)、右欄に「日本語」(=薩摩方言) が書かれている。村山七郎編『ゴンザ 新スラヴ・日本語辞典』では1欄にロシア語、2欄に1欄の語の当時の意味、3欄に日本語(薩摩方言)の片仮名転写、4欄に3欄の語の現代日本語訳が配されている。村山は「まさに、ゴンザの、ソ連科学アカデミー・アジア諸民族研究所レニングラード支部東洋学者アルヒーフに保管されている露和辞典こそ、パラス辞典日本語部の九州的要素の出典なのである。われわれはこの九州的要素が1728年ごろの薩摩方言を表わすと見ることができるのである」と言っている<sup>50)</sup>。

村山七郎『漂流民の言語』、「II. ゴンザの伝える18世紀前半の薩摩方言」には『[項目別露和] 単語集』と『日本語会話入門』の日本語が収められている。

1744年(延享元年)に南部の佐井を出帆した多賀丸漂流民に関しては前節で述べたように第2部にて詳細に扱う。乗組員の一人である「さのすけ」を父とするアンドレイ・タタリノフが編纂した露和語彙集の考察が本論考の主題である。

村山七郎『漂流民の言語』、「IV. J. G. ゲオルギの伝える南部方言(1772年)」で扱う *Bemerkungen einer Reise im russischen Reich im Jahre 1772*, St. Petersburg, 1775の一部は1772年、イルクツクで日本語学校の教師たち5名(利八、伊兵衛、久太郎、長助、久助)からJ. G. ゲオルギが記録したものであり、69語の日本語単語が出ている。これらも佐井村を中心とする南部出身の日本語教師がゲオルギに教示したものである。

1787年刊行のパラス Peter Simon Pallas (П. С. Паллас) 編『欽定全世界言語比較辞典』(Сравнительные словари всѣхъ языковъ и нарѣчій, собранные десницею всевысочайшей особы. または *Linguarum Totius Orbis Vocabularia Comparativa*) はロシア語の基礎的な単語273語に、200の言語の単語をロシア文字で示したものである。161番目に日本漂流民から得られた日本語が記録されている。村山七郎『漂流民の言語』第VI章はこのパラス辞典の言語資料の分析に当てられている。九州方言要素と南部方言要素が共存していると言われている。

大黒屋光太夫により1791年、ペテルブルクでパラス編『欽定全世界言語比較辞典』の改訂に際し提供された約300語近い日本語単語が『アルファベット順配列全言語比較辞典』4巻(ペテルブルク1791年)に掲載されているが、これらは18世紀後半の伊勢方言であると言われている。村山七郎『漂流民の言語』第VII章はこの光太夫の残した言語資料の分析に当てられている。

50) 村山七郎『漂流民の言語』(前掲)、224頁。

これらの『全世界言語比較辞典』に関しては、吉町義雄「露都創刊欽定万国寄語の日本語——二百年前の奥九方言——」も非常に有益である<sup>51)</sup>。

1793年(寛政5年)に仙台石巻を出帆した若宮丸が漂流し、その乗組員のうち津太夫、左平、儀兵衛、太十郎の4名がロシアの第2回対日使節団によって送還された際に団長ニコライ・レザノフは船中で彼らから日本語を学び、『日本語を知るための入門書。アルファベット、初歩文法規則及び会話を含む』(1803年)及び『ロシア文字による日本語辞典』(1804年)を書いた。18世紀後半の仙台(石巻)方言であると言われている。レザノフは1805年、『日本滞在中改訂増補されたロシア文字による日本語辞典』(1805年)を書いて辞典の内容を修正している。これは長崎で得られた資料をこの辞典に追加したと言われている。惜しむらくは、これらのレザノフの著作は利用される機会がなかったことである。

(第2部に続く)

— Чем вы зарабатываете себе на жизнь? — переменял разговор Кодаю.

Татаринев ответил, что последние пять лет ничем не занимается, а до этого преподавал японский язык.

— Ясуси Иноуэ. Сны о России. / Пер. с яп. Б. В. Раскина. М., 1977, с. 98.

---

51) 吉町義雄「露都創刊欽定万国寄語の日本語——二百年前の奥九方言——」、『北狄和語考』笠間書院、昭和52[1977]、524(111) - 497(138)頁。